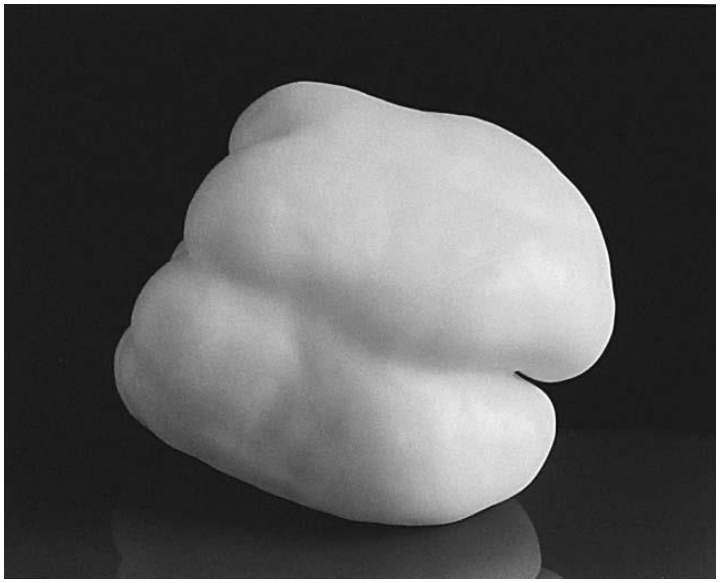
Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2012.10
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.52

CONTENTS

・ヨーロッパ製銀塩モノクロームフィルムの特長(1)
— ADOX CHS 100 —
・ヨーロッパ製銀塩モノクロームフィルムの特長(2)
—イルフォード HP5 プラス 400—
・人物撮影会報告
・人物撮影ライティング（採光）
・Point Light Gallery
・ゾーンシステム研究会定例会日誌
・インフォメーション



ヨーロッパ製
銀塩モノクロームフィルムの特長(1)
― ADOX CHS 100 ―

中島秀雄

長年安定した写真製品を作り続けてきたイーストマン・コダック社は、2012 年の今年、カラーフィルムを始め、銀塩モノクロームフィルムの一部を除き生産中止及び減産体制に入ると発表した。使い慣れた一部のモノクロームフィルムや現像液は当面作り続けると聞いているが、研究会はこれをきっかけにヨーロッパで生産、販売している銀塩モノクロームフィルムを対象としてテスト撮影することになった。

以前からヨーロッパで作られている銀塩モノクロフィルムに興味を持ち、すでに使っている会員も多く、その特長は作品を通して確認している。また、海外では再びモノクローム写真に関心が集まっていることもあり、彼らが使っているであろうヨーロッパ製モノクロームフィルムのデーターを取り、作例プリントを作ってその特長を見てみることになった。

第一回・・・ADOX CHS 100

今回、私が担当したフィルム ADOX CHS 100 フィルムはドイツの製品で、アグファの乳剤がベースになっているようだ。ADOX の中で感度の高いフィルムは 8x10 サイズしかなく、4x5 インチにカットして使った。使い残した 8x10 インチフィルムを時々4x5 インチサイズにカットして使うことがあるが、作業には薄手のゴム手袋が必要になる。

1/4 にカットするとコードノッチは一枚となり、乳剤面に注意しながら進める必要がある。

フィルム現像

4x5 インチフィルムの現像には JOBO 3010 を使い、手製のモータープロセッサーを利用している。プロセッサーの利用で以前に比べてネガのキズ、ムラは圧倒的に少なく、シートフィルム現像にはベストだと思っている。回転スピードは速くても遅くてもだめで、研究が必要。全暗室で ADOX フィルムに触っても、コダック製品のように乳剤面とベース面の区別はつかず、両面が乳剤面のような印象を持った。

実用感度と標準現像時間

指定では、前浴なしで進めるとなっているが、私はいつものやり方で前浴から進めた。濡れたフィルムの扱いには注意が必要と書かれているが、現像タンクにフィルムをセットすると現像終了までフィルムに触れることはなく、酸性硬膜定着液によって硬膜処理されるので通常の処理で十分と言える。

乾燥した未露光のフィルムカブリ＋ベース濃度は 0.10 となり、シートフィルムとしては高い値だ。ここから 0.20 の濃度を求めることが感度基準になり、ISO 50 となった。

カブリ＋ベース濃度が高いフィルムとして T-X ブローニーフィルム、T-MAX ブローニーフィルムがある。カブリ濃度が高いフィルムはシャドーの描写にすぐれ、全体にコントラストを押さえてくれる。しかし、その分ハイライトにコントラストの不足を感じている。

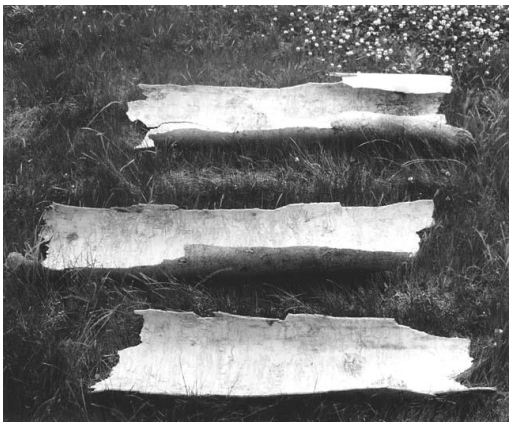
次に ISO50 を基にして標準現像時間を求めることになる。標準現像時間を求める方法は、プリントして正しいゾーンⅧを求めることであるからグレーカードをゾーンⅧで 4 枚撮影し、それぞれ現像時間を変えて(6、8、10、12 分)現像してネガを作る。出来たネガを引き伸ばし機に順に装填し

てプリントする。定着後、水の中で印画紙自体の白よりわずかにトーンが出ているプリントを見つけると、そのネガは**10分現像のネガ**となった。

撮影

樹皮(bark)を草地で撮影した。ランダムな切り口、半円形の形状、わずかに残る内側の樹紋にひきつけられた。草地はゾーンⅣからⅤ、樹皮の内側はゾーンⅥからⅦ1/2 と出た。プリントしてみるとハイライトの分離が弱いように感じる。その分、シャドー部から中間のトーンがすばらしく、全体になめらかな描写で扱いやすいフィルムと感じた。

コントラストの強い被写体条件の場合、ゾーンシステムではマイナス現像を奨めている。その場合、シャドー部の減少に注意が必要になる。ADOX フィルムは、マイナス現像にうまく適応できるように感じた。今後、標準コントラストの被写体には今までのフィルムを使い、コントラストの強い被写体には ADOX フィルムを使ってコントラストを下げるような使い方が出来るかもしれない。



プリントデータ

引伸光源/コールドライト、印画紙/Rembrant V G2、現像液/Papitole 1:1、Filter 2

現像プロセス

ADOX CHS100 （公称感度 ISO100）

現像液・ D-76 希釈率 1：1 20±0.5℃

タンク・ JOBO 3010/モータープロセッサー

定着液・ 酸性硬膜定着 6 分

テスト撮影データ

ISO	絞り	シャツター	濃度
50	f8	1/30 秒	0.20
64	f8 1/3	1/30 秒	0.19
80	f8 2/3	1/30 秒	0.18
100	f11	1/30 秒	0.17
125	f11 1/3	1/30 秒	0.16
160	f11 2/3	1/30 秒	0.15
スヌケ			0.10

＊感度基準濃度は、スヌケ濃度 0.1＋0.1=0.2。ISO50 で撮影したネガ濃度が 0.2 となっているから、フィルム感度は ISO50 となる。

実用感度：ISO50

標準現像時間テストデータ

ISO50 4 枚のフィルムに f8 1/8 秒で撮影

1, EV13 をゾーンⅧで撮影 6 分現像

2, EV13 をゾーンⅧで撮影 8 分現像

3, EV13 をゾーンⅧで撮影 10 分現像

4, EV13 をゾーンⅧで撮影 12 分現像

ゾーンⅧのプリントを得るネガは、10 分のネガとなった。

標準現像時間：10 分

ADOX CHS100 開発の詳細（英文訳）

これらのフィルムは、1950 年代に作られた古い ADOX の処方によって作られ、かつて学校の教材として作られた乳剤である。

このフィルムを使ってあなたが眺める世界は、50、60 年代の眺めといえる。それは、素晴らしいトーンレンジ、色の分離、そして、変調をもっていて現代のフィルムとは違っている。特に、青空を背景にして風景を撮る場合、現代のフィルムで撮る場合とイメージは異なり、深みのある濃いグレー風景となる。

このフィルムには、豊かな諧調と黒と白の間にあるバリューを広げることを可能にする高度の銀が含まれている。

Adox フィルムによって捉えた写真は、プリントすることで現れる。

Adox フイルムを APH09 のようなシャープ効果のある現像液で現像するなら、深いディテールと高い鮮鋭度が得られる。なぜならフィルムの低拡散層技術により単層に塗布されたことで、多層に塗布されたフィルムの光の通過拡散よりシャープだからだ。

CHS は、Cubiccrystal Heterodispers シングルレイヤの略で、これは、エマルジョンを異なるサイズで混合し、一つの層にコーティングされた古典的な結晶構成となっている。

CHS100 は、古いテクノロジーによるベースで作られた最も早いスピードのフィルムだ。1950 年、それは、ハイスピードフィルムと呼ばれていた。初期の早いフィルムは、広い露光ラチチュードとコントラストを持っていて、Adox ファミリーの中では最大のフィルム粒子の開発だった。

もし、あなたがパイロ現像液を使用するなら、Adox CHS100 は現在のフィルムよりも被写体のゾーンはほぼ完全になる。

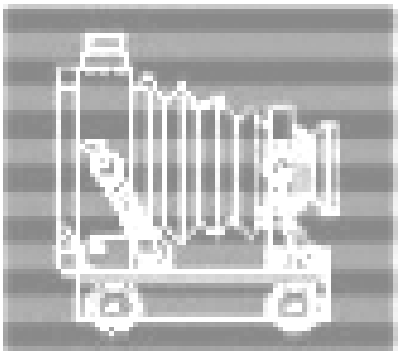
使用するためのヒント

前浴は、開発者がシートフィルムにムラを避けるために均一に塗ったコーティングを溶解させてしまいます。

濡れている乳剤面を手で触る場合は特に注意が必要だ。現代のフィルム乳剤よりも柔らかいからだ。

もし硬膜液が必要なら、それぞれの液に入れる前に、いくらかの硬膜液を停止液か定着液の中にいれるか、又は、前浴として、1 リットルの水の中に 5ml の硬膜液をつくる。

Freestyle 資料参照



ヨーロッパ製
銀塩モノクロームフィルムの特長(2)
― イルフォード HP5 プラス 400 ―

畑文夫

【テスト対象フィルム】

イルフォード HP5 プラス 400
（４×５シートフィルム）

【現像条件】

・現像液　D76　１：１希釈　２０℃
・現像方法　JOBO ドラム２８３０
　手製４×５アダプター使用、手動回転
・現像時間　８、９、１１、１３、１６分

【結果】

現像時間	実効感度
８分	２００
１１分	**２５０**
１３分～	３００弱

現像時間	プラス・マイナス
８分	N－２
１１分	**N　（標準）**
１６分	N＋２

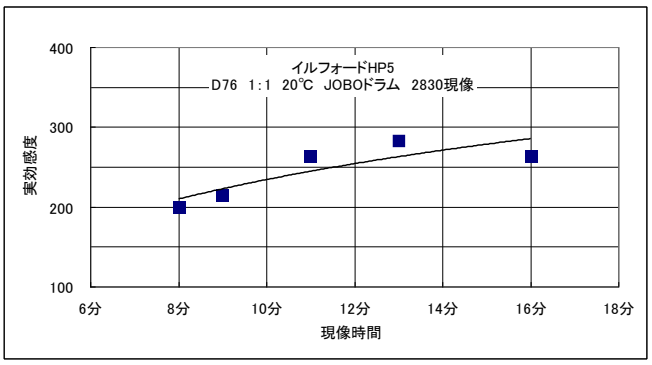
【テスト撮影】

【詳細データ】

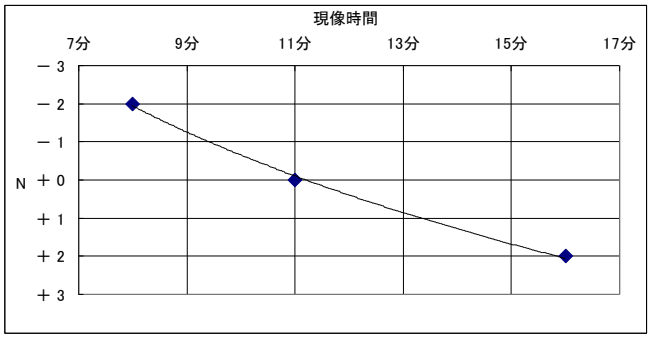
１１分現像のフィルム濃度

露光	濃度	B＋F 濃度	差	感度
＋1EV	0.30	0.16	0.14	200
＋2／３EV	0.27		**0.11**	**250**
＋１／３EV	0.23		0.07	320
ZONE　I	0.22		0.06	400
－１／３EV	0.20		0.04	500
－2／３EV	0.19		0.03	640
－1EV	0.18		0.02	800

現像時間と実効感度



現像時間とプラス・マイナス



人物撮影会報告

荒井崇

・日時：2012 年 3 月 31 日（土）13:00～21:30
・場所：文京区シビックセンター会議室
・参加者：中島代表、浜野、荒井、北野、越後、倉又、川北、久保田、長谷川、畑（準備作業）
・モデル：村松さん（写真家、女性）

今年のゾーンシステム研究会写真展課題テーマは「働く人」。現在会員は、それぞれ、被写体になる人物を探し、撮影にトライしている。そこで今回は、人物撮影の基本を学ぶことが目的である。

なお照明機器は、照明条件のわかりやすいフラッドランプ照明（研究会推奨）を使用した。

まず、中島代表による人物撮影ライティング基礎の解説。今回は、中島代表にテキストを作成してもらい、テキストに沿って説明からスタートした。（テキスト内容は、本会報次項に掲載。）

人物撮影ライティングに関しては、知識のある会員もいるが、普段から人物を撮影する機会の少ない会員がほとんど。ライティングの基礎を１つ１つ確認しながら撮影を進めて行った。

今回のモデルは、まず撮影者自身交代しながら撮影を行った。

ライティングに関しては、フロント、サイド、レンブラント、プレーン等にトライ。また、髪の毛へのトップライトや、背景のバックライトなどへの補助光セット。レフ板による顔輪郭やあご下などのシャドー部への光量追加。光の調整を行いながら、悪戦苦闘しながらの撮影となった。

ここで人物ライティングポイントの１つは照明比である。（顔のハイライトとシャドーの輝度比）

2:1（1 絞り差）、3:1（1.5 絞り差）、4:1（2 絞り差）などがあり、作意によって設定を決めるが、最近は 3:1 あたりが主流。

また、基本的な顔のハイライトのゾーンは、ⅥからⅦの間くらいが推奨とのことである。

他に、撮影に関して１つ重要な注意点があった。それはフラッドランプの消費電力だ。フラッドランプは 1 つで 500W レベルの消費電力が必要。よって多数使用すると、ブレーカーが落ちる可能性が大きい。事前にブレーカーの許容電流値（アンペア数値）を確認のこと。

以上、大変有意義な人物撮影会であった。
今後、会員によるすばらしい人物ファインプリント作品を期待したい。

人物撮影ライティング（採光）

中島秀雄

天候に支配されず、恒常的な採光の状態で人物撮影となるとスタジオか室内撮影となる。最初にスタジオを作り、人物撮影を商業化したのは、フランスの*写真家・**ナダール**と言われている。北側の窓を大きくつくり、柔らかな光を取り入れ、人物写真は肖像画のようなイメージで撮られていた。*Nadar　(Gaspard Felix Tournachon 1820-1910)

現在、スタジオや室内で人物及びコマーシャル撮影となると、カメラサイズに関係なく 100%近くストロボ照明があたりまえとなっている。しかし、ストロボ光線は一瞬の光であるから目前の被写体を照明の明かりで見ることは出来ず、確認するにはインスタントフィルムやモニターで見ることになる。大型カメラによる人物写真で有名なカナダの写真家 ***ユーサフ・カーシュ**の作品は、従来の照明によるライティングに特長がある。そこから生み出されたモノクローム写真には、人物の個性と相まって魅力あふれるプリント作品になっている。写真家は、巧みなライティングによる舞台の演出家ともいえる。

*Yousuf Karsh , 1908-20002 アルメニア生まれ、カナダの写真家ジョン・ガロに師事、オタワでスタジオを開設

室内やスタジオ撮影にはどんな利点、特長があるのか

・雨、曇り、風といった天候に左右されない。
・周囲の猥雑な景色に惑わされることもない。
・小道具や巧みな照明によって架空の世界を作り出すことも出来る。
・照明は自然光と違い、一定の光線の中で長い時間使用可能。
・光量調整が可能で、ハイライトやシャドーの制御が可能。

最近、人物にカメラを向けることが多くなった。声をかけると、だいたい興味を示してくれる。多くの人は大型カメラで撮られた経験はなく、カメラ、照明、ピント合わせ、フィルム交換といった撮影自体に興味を持ってくれる。外で撮ることもあるが、室内や仕事場はその人たちの安心できる空間で、自然な表情を捉えることが出来る。しかし、室内となると自然光だけでは足りず、照明が必要になる。500w のフラッドランプ 2-3 灯あれば、何とかクリヤーできるが、事前に、基本的なライティングは理解しておきたい。

■人工光源の種類（撮影用）

・フォトリフレクターランプ	3200°K
・ハロゲンランプ	3200°K
・ブルーフラッドランプ	5500°K
・蛍光灯　(電子放射)	4000-5000°K
・ストロボ	5000-6000°K

■°K (色温度の単位)

光源の色質を数値化したもので物理学上の絶対温度で表示。

自然光はおよそ 5500°K。数値が低いと赤の成分が多く、数値が高いと青の成分が多い。

注) フォトリフレクターランプやハロゲンランプなど青の成分が少ない光源を使う場合、モノクローム撮影では感度不足を補う必要があり、1/3 絞り感度を下げて撮影するとよい。

■ライティングに必要な機材

ライトスタンド、ランプソケット、クランプ、ランプケージ、コード、テーブルタップ、トレシングペーパー、バックペーパー紙・布、パーンロッ

ド、バウンズ板、ハレきり　他

■一般的なライティングの名称と主光線の位置

・フロントライティング

・・・人物の正面からのライト、多くは∠45度の位置

・プレインライティング

・・・人物に対して∠45度の高さ、カメラから∠45度の位置

・レンブラントライティング

・・・プレインライトにおいて、カメラは人物の∠45度の位置（背景黒）

・サイドライティング

・・・人物の横からのライト

・バックライティング

・・・人物の後方からのライト

・フットライティング

・・・人物の正面、下方向からのライト

・トップライティング

・・・人物の上方向からのライト

■ライトの役割の名称

・メインライト

・・・主光線

(自然光線の太陽の役割) (テーマを強調)

・サブライト

・・・主光線による影の部分を補い、諧調と光域の調整

・エフェクトライト

・・・アクセントをつける

(部分の強調と抑揚を与える)

・バックライト

・・・背景紙を照明するライト

・キャッチライト

・・・人物の目に点光源としての役割

・スカイライト

・・・青空光、雲からの光を意味する上方からの照明

■家庭用電力

照明を使う以上基本的な電力関係を確認しておきたい。

A.　アンペア　　電流の単位

V.　ボルテージ　　電圧の単位

W.　ワット　　電力の単位

A　x　V = W　　電力は電流と電圧の積に等しく、バランスを崩すとブレーカーが飛ぶ。

（例）15A x 100V =1500w

家庭用コンセントの電流が 15A と書いてあれば、500W の電球は 3 灯まで可能という意味。

■ライティング撮影の注意点

・電気容量の確認

・メインライトは、複数ランプをトレーシングペーパー、バウンス板等で 1 つの光源になるようにまとめる 。

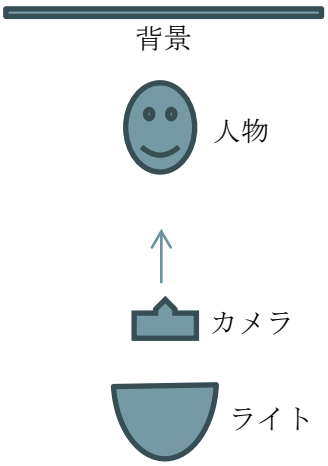
・二つの影は作らない

・背景の影に注意

・レンズへの光の写り込みに注意

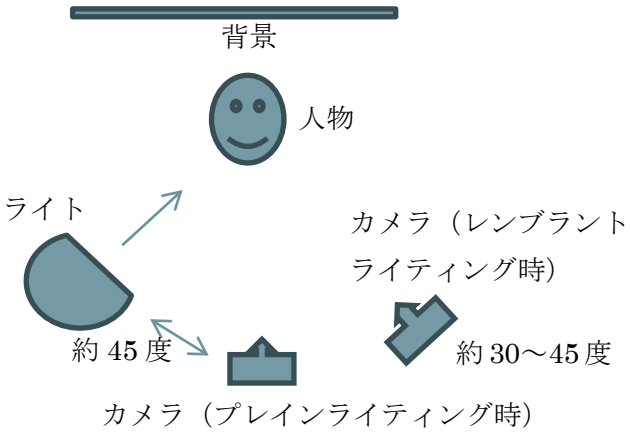
・ライトスタンド、コードに注意

基本ライティング・図解



フロントライティング

人物撮影の標準的なライティングといえる。
人物の正面 45 度の高さにライトを位置すると、自然と鼻の下に影が出来るのが特長で、これをバウンス板で弱めることもある。
週刊誌の表誌に多く使われるライティング。
＊個性を強めないライティング
＊背景を明るく照明する場合も多い

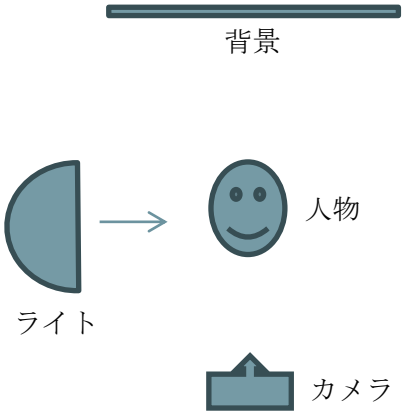


プレインライティング

人物撮影に多く使われるライティング。
人物の 45 度、高さ 45 度にライトを位置すると光の当たる人物の反対側に逆三角の光が現れ、全体に立体感が増す。

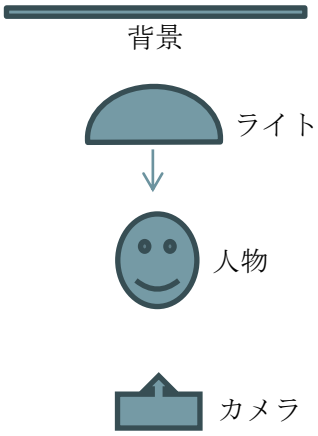
レンブラントライティング

画家・レンブラントが好んだ照明で、カメラはシャドウ側に位置する。立体感と個性が強調される。背景は黒系が多い。



サイドライティング

人物の真横にライトを位置し、顔の半分に照明する。強い個性とドラマチックな演出効果が現れる。



バックライティング

人物の真後ろからの照明で、人物のアウトラインにハイライトが現われ照明自体は、人物によって隠れる。

照明比（主光線と補助光線の明るさの比）

2:1　主光線と補助光線の明るさの差が 1 絞り

4:1　主光線と補助光線の明るさの差が 2 絞り

Point Light Gallery

古谷津純一

2012年6月30日から7月29日まで、オーストラリア・シドニーのPoint Light という写真ギャラリーにおいて、John Studholme氏と小生の2人展が開催された。Studholme氏は、タスマニア北部に居住する写真家で、自然風景を8x10カメラで撮影し、Ziatype processを用いたプリントを作製しているそうだ。小生がシドニーの写真ギャラリーで写真展を開催出来た経緯について報告したい。

2012年3月、オーストラリアに旅行する機会を得た。広大な面積を誇るオーストラリアのどこを旅するかは迷うところであったが、幼い頃から憧れていたウルル（エアーズロック）を選択するのに時間を要さなかった。そして、移動を考慮すると、他にはオペラハウスやハーバーブリッジで有名なシドニーを周るのが精いっぱいであろうと思われた。

旅先で写真を撮る愉しみは格別である。もっとも小生の場合、研究会会員の皆様と同様に、写真撮影が旅の筆頭目的であるから、なおさらである。5x7カメラにレンズ3本、フィルムホルダー10枚とフィルム、露出計やフィルターなどのアクセサリーと三脚で結構な体積と重量になったが、さらに散歩の友としてハッセルブラッドSWCを加えた。

そしてもう一つ、研究会に入門してからは、旅先の愉しみとしてギャラリー訪問が加わった。折角の大都市シドニー滞在なので、写真専門のギャラリーをインターネットで検索してみると、「Point Light Gallery」 がもっとも興味深いギャラリーであった。しかしながら残念なことに滞在予定中には作品展が予定されておらず、念のため確認のメールをしたところ、特に企画はしていないが、コレクションを見せてくださるとの返信を頂戴した。以降数回にわたるメールにて自身の写真スタイルなどを連絡すると、ギャラリーオーナーであるGordon Undy 氏も大判黒白写真を専門に撮影しているとのことで、「いろいろ話ができるといいね」との連絡がきた。訪問の日時を調整し、半日のアポイントメントを頂いた。

オーストラリアに到着し、ウルルに移動する。3月のオーストラリアは真夏である。結構暑いものの、空気が乾燥しているためか凌ぎやすく、日中でも写真を撮る気になれる。ウルル周辺は砂漠地帯で、地面は赤褐色調の砂利状である。この赤い色は。鉄分含有量が多いためであると聞いた。（写真1）

写真1．さらさらとした赤褐色の砂利状の地面。

ウルルの広大さを満喫し、いよいよシドニーに到着した。翌朝、アポイントメントの15分前にギャラリー付近でタクシーを降りると、20メートルほど先にあるオープンカフェから「ジュンイチ！」の声。Gordonさんである。異国でのこの一言は大変嬉しく、以前にもお会いしたような満面の笑みで我々を迎えてくださった。カフェでコーヒーをご馳走になりながら、話題は既に写真！写

真！写真！・・・使用しているフィルムの種類、現像液の処方、現像方法、印画紙の種類など質問の嵐が吹き荒れる。当方の壊れた英語で応戦するも自身の興奮も隠せない。

コーヒーを終え、ギャラリーに案内される。一歩入った瞬間に、Gordon さんの写真に対する真摯な姿勢を全身に感じる。壁面は学校の黒板のような作りで、いわゆるチョークを置く場所に作品が並べられている。（写真 2，3）

写真 2. シックな造りのギャラリーメインフロア。奥には EBONY の 8x10 カメラが置いてあった。

写真 3. 教室の黒板のような造りの壁面。この方法だと、作品の入れ替えも容易と思われ、自宅にも欲しい。

ギャラリーの奥はオフィスになっており、刺し詰め「工房」といった趣である。大型のドライマウントプレス機やドリルなどが置いてあった。（写真 4）

写真 4. オフィスでは書籍販売もしている。

壁面に展示されている作品を Gordon さんの解説付きで観賞を終えると、Gordon さんが彼のギャラリーコレクションを見せてくれた。

・Paul Caponigro
・George Tice
・Linda Connor
・John Wimberley
・Michael Kenna
・Constantine Manos
・Gordon Undy　　などなど・・・

それぞれの作家 5 点から 10 点程度の大変貴重なオリジナルプリントを、手にとって観賞させてい頂いた。ちなみに、Paul Caponigro と George Tice は Gordon さんの先生だそうだ。
もちろん、Gordon さんのゼラチンシルバープリントやプラチナプリントも拝見した.
Gordon さんは、クイーンズランド州立美術大学を卒業後、Point Light ギャラリーを設立し、国際写真賞の審査員などもなさっている。

次に暗室に案内して頂く。暗室は，前室・暗室・試薬調製室の 3 部屋構成で、前室にはプリントウォッシャー、現像バット、ドライングネットなどが整然と並んでいる。（写真 5）

写真 5．暗室の前室。

暗室は workshop を開催している関係で、かなり広い。中央には大型の流し台が設置してあり、周囲の壁面に沿って引き伸ばし機が並べられている。（写真 6）

・フォコマート Ic，IIc など 5 台
・ダースト 4x5
・ダースト 5x7
・ダースト 8x10・・・・

写真 6. ダースト 8x10 引伸機の前の Gordon さん。

暗室の奥の部屋は試薬調製室で、棚には種々の基礎試薬が並んでおり、薬液は自身で調合しているそうだ。シートフィルムの現像は，皿現像を基本とするが、疲れている場合には CPP2（写真 7 右）で現像するらしい。この試薬調製室だけでも、小生の暗室より広い。（写真 7）

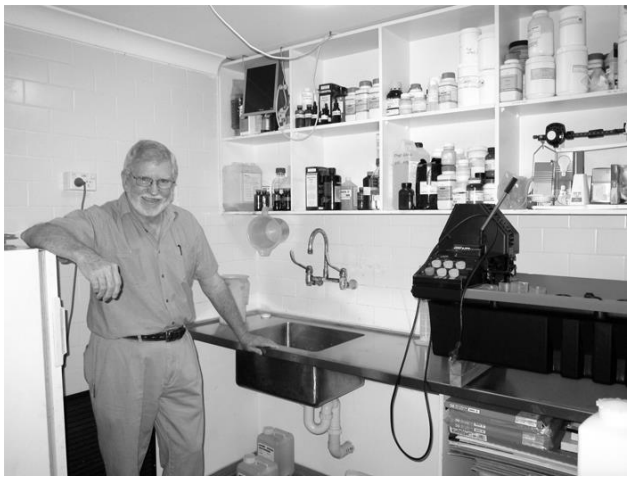


写真 7．試薬調製室。

ラボツアーに感激した後、教室を拝見する。濃度計を用いて「パイロネガティブの濃度計測の基本」についてレクチャーを頂いた。（写真 8）

写真 8．workshop を中心としている写真教室。奥の壁面にはホワイトボードと映写スクリーンがある。

教室のテーブルには、A. Adams も使用していた Corona view 8x10 カメラが置いてあった。これを眺めては「美しい！」を連発したり、EBONY 8x10 カメラのムーブメントを動かしては、EBONY 社のカメラ作りを絶賛したりしたのが印象的であった。ちなみに、教室には EBONY 社の 11x14 カメラも置いてあった。

その後、私が持参した十数点の作品を質問を交えながらゆっくりと時間をかけて見て下さり、そのうち 10 点を選んで「当ギャラリーで展示したいが、いかがなものか？」とおっしゃる。こんなにうれしいことはない！「是非ともとお願いします！」と即答した。求めに応じ、プリントの裏面に撮影年、撮影場所を書き、サインをして Gordon さんに預けた。額装を施した後、機会をみて展示して下さるという。

最後に記念写真を撮影してギャラリーを後にした。（写真 9）

写真 9. EBONY 8x10 の横で記念撮影。

6 月中旬、Gordon さんからメールが届く。John Studholme 氏との二人展を開催したいがいかがだろうかという。会期は 2012 年 6 月 30 日から 7 月 29 日の週末の 11:00 から 17:00 で、平日は電話予約でオープンする形式だという。
早速「快諾」の返事をメールする。

後日 Point Light Gallery newsletter がメーリングリストメンバーに配信された。（写真 10）

以上がシドニーにおける写真展開催の大まかな経緯である。旅先で撮影した作品はイマイチであったが、Point Light Gallery を訪問し、貴重な体験をさせていただいたこと、さらに写真展まで開催して頂いたことに大変感謝している。

Point Light Gallery

・Address
　Suite 4
　50 Reservoir Street
　Surry Hills NSW 2010
　Australia
・Web site
　http://pointlight.com.au

point light
gallery

analog
an irregular log of events at point light

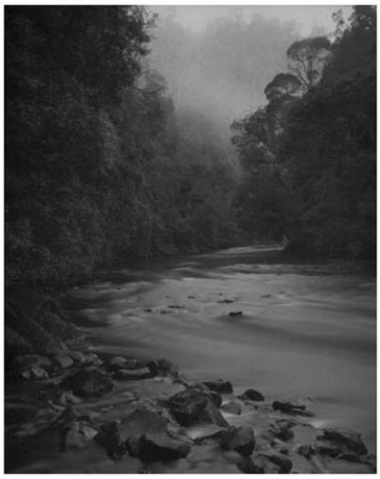
28th June 2012----------Exhibition announcement

John Studholme and Junichi Koyatsu
New Works - 30th June to 29th July
This month we are delighted to bring you the work of two photographers, new to point light, from opposite sides of the Equator. John Studholme from Tasmania and Junichi Koyatsu from Japan are both fine photographic artists who treasure quiet moments in the land. We have had photographs from both in our possession for several months waiting for an opportunity to be seen and that moment has arrived. Good photographs which let us understand something of the soul of the artist are rare and to be treasured and we think you will find that is a strong characteristic of these works.

John Studholme works from his home in northern Tasmania with an 8x10 inch camera and makes his photographs using the Ziatype process, a version of platinum/palladium contact printing named by Richard Sullivan, exhibiting subtle colour variations and totally suitable for John's moods - and that is important because he has a particularly sensitive approach to his subject matter which demands a gentle expression.

John will be at point light gallery on Saturday 14th July so if you would like to meet him please come in for a drink and nibbles and chat with him about his work.

Gallery Hours: 11am to 5pm weekends
or by appointment: 0408 461 664
Please click on the pictures for a larger view. It's worth doing.



Junichi Koyatsu shows in his work a Zen-like appreciation of the land and sea. His photographs, made in silver gelatin, are examples of total control over the medium, using its tonal expressiveness to the fullest extent. Quite traditional subject matter has been expressed in the most exquisite manner, rivalling the best work I have seen in this medium.
Junichi works with large format cameras up to 8x10 inches in the traditional manner of many landscape photographers for the last century or so. The fact that many photographers still choose these tools is a tribute to the fact that, in terms of subtlety of expression, nothing comes close.

Suite 4, 50 Reservoir Street, SURRY HILLS, NSW 2010 Australia
Telephone: 02 9281 6615 Mobile: 04 0846 1664
Email: gallery@pointlight.com.au
Web: www.pointlight.com.au

写真 10．写真展案内のニュースレター。

ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会定例会日誌

2012 年 7 月 14 日（土）

文京区シビックセンター会議室

出席者：中島代表、越後、浜野、長谷川、酒巻、松本、倉又、岡崎、金子、荒井、畑、古谷津、橘田、石井、満丸（見学）

・作品持参者：越後、浜野、長谷川、酒巻、松本、倉又、岡崎、金子、荒井、畑

■ 中島代表より

●写真展の作品創りはまだ時間があるので集中していただきたい。

●暗室ワークは工芸大の都合により９月１日（土）となった。

出展作品のプリントにも活用していただきたい。

●伊豆シャボテン公園が閉鎖になるという情報がある。被写体も魅力的で撮影もやりやすいので、今のうちに訪れたい。

●ギャラリーレクチャーの情報

（7 月 21 日開催どちらも募集は締め切り済）

＊デボラ・クロチコ氏によるポートフォリオレビュー：ギャラリーコスモス

＊LOST & FOUND PROJECT（被災した写真の再生プロジェクト）：PGI

●検討していた研究会の拠点作り（暗室など）は、諸般の事情で中断となった。

■ 写真展について

●広報用プリント未発送の方（小菅、古谷津氏）は 17 日必着で金子氏あて郵送していただく。裏面には氏名とタイトルを記入。

●写真展初日（１０月１８日）に、古典楽器によるギャラリーコンサートを開催予定。

ビオラ･ダ･ガンバとテオルボ合奏 2 曲 40 分程度。

2012 年 8 月 11 日（土）

文京区シビックセンター会議室

出席者：中島代表、長谷川、松本、酒巻、穴澤、浜野、北野、川北、金子、畑、皆川、石井、鶴見、荒井（役員会のみ）

・作品持参者：長谷川、松本、酒巻、穴澤、浜野、北野、川北、金子、畑

■ 中島代表より

●展覧会作品の集まりがよくない、皆さん急いで提出していただきたい。

●研究会のポートフォリオをサンディエゴ写真美術館に寄贈した。

写真美術館館長　デボラ・クロチコさんが来日した折に見てもらったところ、「大変美しい。日本に来て初めて良いプリントを見た。」との評価を頂き、収蔵してもらえることになった。

＊美術館ホームページ　www.mopa.org

＊デボラ・クロチコさんについては、会報 No.14,16 を参照

●上空には、美しい雲が連日湧き出ている。スティーグリッツの Equivalent （等価）シリーズも参考に撮影してみていただきたい。

■ 写真展実行委員より
●今年は例年より日程が１ヶ月程度早い。
現時点で未定の方は、候補作品の制作を早急にお願いしたい。
●９月例会（９月８日）・・・出展作の最終選定
当日持参できない場合は、中島代表宛に郵送。
●10 月例会（10 月 13 日）・・・額装の最終確認
OK となった作品はそのまま会場に発送。
修正がある場合は、10 月 17 日（水）に会場へ持参していただく。
●作品サイズは中島代表より指示
8×10・・・画像のサイズを 8×10 とする（より大きな印画紙にプリント）
11×14、14×17・・・余白は片側２０ｍｍ以上
●マットは各自で用意する（昨年同様）
そのほか詳細は別途説明します。

■ 暗室ワーク（９月１日（土）工芸大）
●暗室ワーク参加希望者は、準備の都合上、ネガサイズ、印画紙サイズを要連絡。

2011年9月8日（土）
文京区シビックセンター会議室
・出席者： 中島代表、穴澤、越後、金子、北野、古谷津、酒巻、鈴木、長谷川、畑、浜野、藤田、松本、皆川
・作品持参者： 穴澤、越後、金子、北野、古谷津、酒巻、長谷川、畑、浜野、藤田、松本、皆川

■ 暗室ワークの反省（中島代表）
●セーフライトによるカブリがあり、事前にテストすべきだった。（新暗室になってから毎年トラブが発生している。）
●コンタクトプリントで事前にネガの問題を把握することが必要。
●各位は撮影枚数を増やし、プリントする機会を増やしてほしい。体験でしか会得できない技術もある。
●暗室ワークに参加した人の中でセレニウム調色の出来ない人は、中島代表に依頼すること。
●会員より、暗室ワークを年一回から増やしてほしいとの希望あり。

■ 写真展の準備（金子委員長より）
●出展数が少ないため、中島代表から何人かに打診する。（ポートフォリオの額装展示も必要）
●出品作のデータは 9 月末までに荒井氏あて連絡すること。
●DM は各自、会期 2 週間前を目安に出すこと。
●10 月例会（10/13）にて最終プリントを額装して持参する。
中島代表の OK が出ればそのまま梱包して搬入。
●本日までに確認をとれていない方は、中島代表宛プリントを郵送すること。
●販売用 5×7 プリントは一枚ずつ透明袋に入れて確認を受ける。
（展示販売方法は別途検討する。）
●会場入り口のプリントは古谷津氏作品とする
（DM 掲載作を 10×12 サイズでプリントする。）
●作品タイトル、プライスリスト、ゾーン説明パネルなど制作　（担当：畑氏）

＊ 例会後、有志で織作峰子展を見学した。
（新宿ペンタックスフォーラム）

Information

【トッピックス】

■暗室ワーク

研究恒例の暗室ワークが行われました。
会員 10 名が参加。充実したワークショップとなりました。

・日時：2012 年 9 月 1 日（土）
・場所：工芸大中野キャンパス暗室
・参加者：中島代表、松本、酒巻、長谷川（午前中）、穴澤、越後、久保田、皆川、臼井、葛城、畑（手伝い）

■ポートフォリオⅠ
サンディエゴ写真美術館へ寄贈

アメリカのサンディエゴ写真美術館へ、研究会のポートフォリオⅠが寄贈されました。

サンディエゴ写真美術館館長であるデボラ・クロチコ氏来日の際、中島代表とパーティー(2012 年 7 月 22 日）で出会い、寄贈することになった次第です。

デボラ・クロチコ館長は、アダムスが設立したフレンズ・オブ・フォトグラフィーの元会長であり、アダムスに造詣の深い方です。1999 年には、川崎ミュージアムでのアダムス展においても来日しています。

研究会のポートフォリオⅠを見たデボラ・クロチコ館長は、

「日本に来て初めて良いプリントを見た」

と言ってくれたそうです。

［表紙の作品］
・作者：金子正道
・タイトル：８月のパプリカは妖しい
・フィルム：KODAK TMY（T-MAX 400）4x5
・レンズ：135mm
・絞り：f22
・シャッター：8 秒
・キーゾーン：パプリカ影（Ⅴ）
・ハイライト：パプリカ右側（Ⅶ）
・シャドー：バック布（Ⅰ）
・印画紙：SEAGULL VC-FBⅡ

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリント又は JPEG データでお願いします。

２．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの。
（スキャナーでパソコンへ入力します。）
・パソコンの電子メール
・ウィンドウズの Word2000-2003
・text ファイル
（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2003 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に御連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

［編集部］荒井　崇